

聞こえぬ暮らし見つめて

聾の映像作家 きょう再び被災地へ

仮設の戸惑い・笑顔

自身も耳の聞こえない映像作家、今村彩子さん(32) 名古屋市長在任中が、東日本大震災で被災した宮城県の聾者を訪ね歩き、音の情報が得られない苦労や戸惑い、時を経て見せる笑顔を撮り続け、ドキュメンタリー作品にまとめている。震災から1年。「この日を迎える聾者たちの姿を撮るため」に10日、6度目の現地へ入った。



聾者の男性に手話で取材する今村彩子さん 昨年12月、宮城県亘理町

最初に宮城県に入ったのは、震災11日後の昨年3月22日。被災地の聾者はどんな状況にあるのか、広く伝えたいと考えた。

知人や、ろうあ協会を頼り、聾者を訪ね歩いた。岩沼市で菊地信子さん(72)に会ったのは3日目。津波で流された自宅跡地で涙を流していた。「ごめんね、次は笑顔の菊地さんを映すから」と心の中でつぶやいてビデオカメラを向けた。

菊地さんは手話で、地震や津波の様子を語った。

消防車が走るのを見た。だが、避難を呼び掛けるマイクの声は聞こえなかった。近所の人を手招きして車に乗せてくれて、同じように耳の聞こえない夫の藤吉さん(78)と一緒に高台へ逃げて助かった。

避難所にいた菊地さんは「周りの人の話からいろいろがっらい」と今村さんに訴えた。案内の放送が聞こえず、食事の配給に気が

かないこともあった。

今村さんはその後4回、宮城県に入った。これまで計約20人の聾者を訪ねた一方、菊地さん夫婦のもとには毎回通う。

昨年8月には、菊地さんは避難所向かいの仮設住宅に移っていた。12月には、仮設住宅で暮らす人たちに手話を教えていた。両手の人さし指を折り曲げる「こんには」は。菊地さんは「会うと、あいさつしてくれるの」と手話で説明し、笑った。「2人が仮設住宅を出て笑顔で暮らせる日まで訪ね続ける」と決めている。

撮りためた映像は、取材時期ごとに20、30分のDVD作品「架け橋」にまとめている。聾者には「私は聞こえない」と声をあげる勇氣、聞こえる人には聾者がさらされる危険への理解を訴えたいという。タイトルには、聞こえる人と聾者、東北と全国を橋渡ししたいという気持ちを込めた。

貸し出し上映のほか、販売も予定している。字幕付き。問い合わせはスタジオアヤ(052・621・9670)へ。(寺尾佳恵)